

# 日清・日露戦争と短歌表現

——その社会的意義また「新派」の誕生について——

松澤俊二

\*引用文中には、今日から見て差別的な表現も含まれるが、歴史的資料性を考え、原文のまま引用する。

## はじめに

日清戦争（一八九四・七―一八九五・四）、日露戦争（一九〇四―一九〇五）に関わる短歌は、なぜこれまでほとんど注目されてこなかったのか。

理由はいくつか考えられるが、一つには木俣修も示唆するように<sup>①</sup>、アジア・太平洋戦争期に量産された作品が最重要視されてきたからだろう。その時期に個々の歌人が遺した戦争短歌の考察は継続的に重ねられている。<sup>②</sup>『支那事変歌集』、<sup>③</sup>『大東亜戦争歌集』などアンソロジーへの関心も高い。戦争の規模や期間、加害と被害の大きさを考えても、それは当然のことと思われる。

敗戦後も従軍体験者、戦災の被害者や遺族は生存し続けており、昭和の戦争は常に人々の身近にあった。戦後歌人にとっては戦時期の短歌や歌人の在り様を批判し<sup>④</sup>、一方で、わずかな可能性を汲み上げることも重要な課題だった。<sup>⑤</sup>

二つめに、明治の二度の対外戦争と短歌、歌人との関わりが希薄だった（と考えられてきた）<sup>⑥</sup>点が挙げられる。歌壇の論客として知られた岡山巖は一九四三年に〈それらの事件の短歌への反映は余りに弱く余りに微かであった〉と指摘し<sup>⑦</sup>、当時の歌人は〈花鳥風月と身辺人情と、相聞と、儀礼と、其他二三の世界を歌つて、何の疑ふところもなかった〉、ゆえに戦争を詠んだ歌は〈僅かに見出される〉だけでほとんど詠まれなかったと言う。もちろん、この見解は現在の研究水準に比して大きく修正が必要だが、しかしこうした有力な先進の発言が日清・日露

戦争を詠んだ歌への興味を遮断し、研究を進ませなかった事実はあるように思われる。

そもそも明治の戦争短歌にアクセスすることが困難だった。特にアンソロジーについては二重の意味で難しい。一つは、個人歌集でないために短歌全集等に再録される機会が少なかったこと。二つめに戦争という時事に触発され編集されたアンソロジーは熱狂が冷めてしまえば読まれなくなる消費物としての性格を持つと考えられるからである。しかし、戦争が集団に支えられるという前提を重視すれば、アンソロジーは戦争に対する人々の多様な向き合い方、視点や感情をうかがい知るための格好の素材となるだろう。そこで稿者は日清・日露戦争に関わる短歌を集めたアンソロジーを可能な限り収集、検討して当時の戦争に短歌と人々がどう関わったかを議論したい。そして、戦時下の社会における短歌の意義、役割について、あわせて戦争と創生期の「新派」和歌との深い関わりについても論じていく。

### 1、本稿で取り上げるアンソロジーについて

本稿ではアンソロジー二三集を検討対象とする。対象確定にあたっては、はじめに小泉芝三『明治大正短歌資料大成』二卷（一九〇）、立命館大学、本美鉄三『明治大正歌書解題』（一九三〇、白帝書房）を用いて一五集をリストアップした。その後、国立国会図書館と日本近代文学館のウェブページ上の蔵書検索機能を用いて八集を加えた。同種のアンソロジーが今後見つかる可

能性はあるが、ひとまずこの計二三集の検討を進める。（\*次頁の表「日清・日露戦争期のアンソロジー一覧」を参照のこと）この二三集で「1」から「9」までは日清戦争と関連している。ただし、「5」以下は日清の講和後、つまり戦後に出されている。日露戦争と関わる歌集は「10」から「23」まで。戦後に出されたものは「20」以下、「23」まで。

### 2、アンソロジーの編者たちと刊行の背景

はじめに誰がアンソロジーを編んだか、また彼等がそれを実現できた条件を検討する。次頁の一覧表には編者の職業についても記したが、ここからいくつの特徴が指摘できる。

一つは、文学グループの主宰者が多いこと。たとえば、「3」は明治文学会の主幹四宮鳴洲の編、「7」は硯友会の社主田中雪村の編である。明治文学会は儒教道徳や漢詩文などを「勃興」させ、かつ「国体を発揚」することを目指し活動した<sup>(8)</sup>。機関誌に「明治文学」があり、漢詩文が中心だが和歌も掲載している。また、硯友会は一八八四年より「江湖雅友の吟詠」を発表するために「硯の友」を刊行した<sup>(9)</sup>。これらの会誌に拠る制作者集団は日頃から詩文を詠作し、発表する慣習を持っていた。ゆえに戦端が開かれ政治と文学とを結ぶ論理が共有されれば、スムーズに戦争詩歌の担い手となった。

また、文学グループの主宰者たちはアンソロジー編纂のノウハウを持っていた。「8」を編んだ橘道守（権本吟社主宰）なら

●日清・日露戦争期のアンソロジー一覧

番号	刊行年月	タイトル	発行所(者) / 発行地/価格	編者	職業
[1]	1894.9	国民熱血日清戦争詩歌	正明堂/東京/7銭	長村達之(山紫水明楼主人)	不明
[2]	1894.10	征清歌集	博文館/東京/10銭	佐佐木信綱	竹相会主宰
[3]	1894.12	甲午振兵雅頌	鈴木敬親/東京/50銭	四宮憲章(鳴洲)	明治文学会主宰
[4]	1895.2	討清歌集	駿々堂/大阪/10銭	大淵淳(ハースト)	駿々堂(書肆)創業者
[5]	1895.5	征清歌集	済美館/愛知/不明	原田紋右衛門(直茂)	政治家
[6]	1895.8	瓊牙集	多賀神社学園所/東京/非売	芳賀真映	神職(多賀神社官司)
[7]	1895.10	凱旋賀草	親友会/東京/非売	田中克(雪村)	文筆家、親友会社主
[8]	1896.5	凱旋帝国万歳集	権本吟社/東京/35銭	橋道守	権本吟社社長
[9]	1897.5	国光歌集	宇山貞次郎/東京/12銭	宇山貞次郎(香腸)	国光吟社主
[10]	1904.3	征露の歌	文学同志会/東京/20銭	大月陸	文筆家、文学同志会設立
[11]	1904.5	征露歌集	山田正賢/大阪/20銭	山田正賢	同好会幹事
[12]	1904.6	征露の歌	大阪新報社/大阪/5銭	松本富太郎	大阪新報に関連?
[13]	1904.11	忠烈歌集	大日本歌道奨励会/東京/25銭	井原豊作	千代田通信社社長
[14]	1904.11	広瀬中佐忠烈表彰歌詩俳句集	読売新聞日教社/東京/20銭	読売新聞編集局	同左
[15]	1904.12	おやごころ	高崎正風/東京/非売	高崎正風	宮内省御歌所長
[16]	1905.1	征露軍人吟詠集	近時画報社/東京/15銭	国木田哲夫(独券)・枝元長夫	宮内省御歌所長 編集者
[17]	1905.2	山桜集	開発社/東京/上製1円並製65銭	岩崎英重(秋月鶴川)	歴史家
[18]	1905.3	日露戦役記念和歌集	小池直次郎/静岡/不明	小池直次郎(不二ヶ舎歌会)	小池南庄活版部
[19]	1905.4	国民之本領正氣歌詩解(付征露名家詩歌集)	矢嶋誠進堂/大阪/25銭	中村甚(柳雨)	文筆家
[20]	1906.5	丹魂詩歌集	高取慈榮/大阪/非売	高取慈榮	僧侶(瀧谷山明王寺住職)
[21]	1906.12	征露記念滑稽百人一首	晴光館/東京/12銭	旭桜山人	文筆家
[22]	1908.8	王砲集	菟道春千代/東京/非売	外崎堂	漢学者、宮内官僚
[23]	1909.11	日露戦役記念和歌集	言霊会/茨城/不明	大谷常業の編か?	神職(言霊会代表)

ば日清開戦前にすでに『明治歌集』（二八七七年以降、九編まで刊行）などの編者があった。また、「2」の佐佐木信綱も父弘綱と『千代田歌集』（二八九〇年以降、三篇まで刊行）を編んだ経験がある。開戦後、彼等がすみやかにアンソロジーを刊行し得たのは、そうした経験を備えていたからと考えられる。

二つめに宗教者が幾名かいる。たとえば「6」を編んだ芳賀真咲（\*芳賀矢一の父）は多賀神社（滋賀県）の宮司だった。芳賀は（陸海軍連戦連勝を祝賀し且大全勝を祈らん）がために一週間にわたり花火、撃剣、幻灯、神楽等を神域内で催した。そして、人々の（詠歌奉納を乞ひ日々神奏して至誠を尽して祈願）した。このとき多賀神社には地域の（氏子信仰の人々は勿論）、大越滋賀県知事や旧藩主家の井伊伯爵も来場した。

日清戦争期において宗教者は（民衆の神仏への祈りの広がり背景）に（率先して戦勝の祈禱、伝道、説教を実施）し、地域における（戦争支持意識の形成に努めた）という。<sup>12</sup>この指摘をふまえていえば、芳賀は人々に戦勝祈願のための詠歌と献詠の機会を提供した。そのことで人々の（戦争支持意識）をいっそう強固なものにしようとしたのである。

三つめに、雑誌発行や新聞社と関わる人達がいた。<sup>13</sup>代表的な人物としては「16」を編んだ国木田独歩がいる。当時独歩は近事画報社に勤める敏腕編集者<sup>14</sup>で、グラフ誌「戦時画報」を編集しながら、一方で兵士たちの詩歌も蒐集し『征露軍人吟詠集』を刊行した。

森鷗外（\*軍医として日露戦争に参加）によると、戦場に臨む将士の間では詩歌の制作が盛んだったという。鷗外は（高等司令部から兵卒の舎営迄、何処にも詩の会がある、歌の会がある、俳諧の会がある）と証言する。将士らは戦闘の前の（数十日の準備と整頓）の期間に、（胸の中に鬱積する感情をどうにかして洩）らすための神と詩を求めたというのだ。<sup>15</sup>独歩は彼らの詩歌を整理、編輯して一書をもしたのである。

新聞社は、また別の仕方で作作者集団を創り出した。「14」に注目しておこう。

一九〇五年三月二十七日、広瀬武夫中佐は旅順港の閉塞戦に参加、姿の見えなくなった部下の杉野孫七兵曹長の行方を案じながら戦死した。数日後、「読売新聞」は（広瀬中佐の忠烈表彰詩歌俳句の募集）を「社告」（二九〇四・四二）で呼びかけた。戦地で起こる様々な出来事のなかから一つだけ広瀬の死を選び、クローズアップして人々に提示したのである。

これに対して、ある読者は（一人も多く投稿して当代国民の感想を遺憾なく発表したい）と集への積極的な参加を宣言している。<sup>16</sup>ここでいう（当代国民の感想）とは、「14」収載の歌を見る限り、広瀬の死を悼み、ロシア兵の無道を憤る内容として概括して良い。無数の同質的な（感想）が凝集する「14」を読む人々は、彼も私も同じ日本人であるという共同性を確認したことだろう。先の「社告」は、集まった詩歌を宮内省、各鎮守府及各軍艦、各地図書館にも寄贈するとも報じていた。このよ

うに新聞社は広範囲かつ多量の人々を戦争詩歌の制作者・受容者とし、さらに戦時国民へと変えようとしたのである。<sup>17)</sup>

### 3、アンソロジーへの様々な期待

ところで、明治期の戦争詩歌アンソロジーは、いかなる目的のもとに刊行され、どのような社会的役割を担っていたのか。それらもまた、アジア・太平洋戦争期のもと同様、戦争を支持し賛美したと概括できるのだろうか。以下では、「1」〔23〕集の凡例や序文などから、刊行者たちが詩歌にどのような期待を寄せていたか考察したい。

本書ハ征清事件ニ関シ同胞諸氏ノ熱血ヲ注カレタル詩歌句文ヲ博ク蒐集セシモノニシテ其作ノ巧拙如何ハ今之ヲ選スルノ必要ナシ。…(中略)…俗謡雜唄ノ類ト雖モ苟モ敵愾振氣ノ意味アル者ハ之ヲ載ス。

〔1〕 正明堂「凡例」『国民熱血 日清戦争詩歌』

〔1〕では〈敵愾振氣〉の意味がある歌を集めたという。つまり編者は清という〈敵〉への怒りを惹起するだろう効果を詩歌に期待していた。収録歌も見ておこう。

豚のよなちゃんくくの尾を引ッ捉へ長々しくも珠数つなぎ  
せん  
陳紛閑人

わがいくさ勝ちぬと云へり豚きりていでひと盃の酒は飲み  
てむ  
歩兵第一連隊兵士某  
低くけれど高げに誇るから獅子のその鼻ばしら打くだかば  
や  
阪正臣

一首目。当時、清国人や清兵を侮蔑的に「豚尾漢」、「ちゃん坊主」と呼んだ<sup>18)</sup>。彼らを捕まえ珠数つなぎにしようという。二首目は戦場の兵士の歌か。清兵を〈豚〉と呼び、それを酒肴にして今日の勝ちを祝うというところか。三首目、自負心ばかり強い〈から獅子〉、この〈から〉には、「唐」と中身のないう意味の「から」が掛けられていると思われるが、彼らの〈鼻ばしら〉を打ち砕きたいという。

このように本集にはレイシズムの見本のような歌が頻出するが、ただし、すべてのアンソロジーが敵愾心を高揚させ人々を鼓舞することを目的としていたわけではなかったようだ。他のアンソロジーの凡例や序文などから、編者の狙いが語られていそうな部分を抜き出してみよう。(＊凡例等がなく刊行目的などが不明のものもある。)

〔1〕は先ほど見た〈敵愾振氣〉(凡例)。<sup>〔3〕</sup>〈将欲照国光於千載伝皇威於万世也〉(序)、つまり国の名譽と天皇の威光を末永く伝えようという意。<sup>〔6〕</sup>詠歌を〈日々神奏して至誠を尽して祈願し其詠歌は此を編纂して野戦病院に送り傷病の兵士苦患を慰むることとせん〉(大旨)。<sup>〔8〕</sup>〈征清軍全勝ノ光輝ヲ

宣揚シ将来一層倭魂ヲ發揮セシメン為。さらに「国光ヲ発揚シ敵愾心ヲ涵養スルノ芳詠ト親族ノ遺勲友人ノ戦況ヲ不朽ニ伝フル玉吟」(凡例)の投稿を呼びかける。(9)「皇の聖徳を頌し併せて当代の盛事を後世に旺歌せしめん」(明治歌林「二八九六四」収載の広告)。ここまでが日清戦争期アンソロジーの刊行目的、理由となる。

続いて日露戦争期では、「11」(当地梅田駅通過ノ出征軍人、各師団、出征艦隊及ヒ各病院ニ於テ療養中ナル負傷軍人等ニ寄贈センカ為メ編纂シタルモノ)(征露歌集寄附者氏名)。(12)「国民の元気を鼓舞作興せん」(はしがき)。(13)「くがとうみとのみいくさびとたちをなぐさめばや」(序)。(14)「広瀬武夫について」(現在の国民が君の忠死に対する無量の感慨を録して、永く後生子孫に伝へん)(巻頭の文)。(15)「皇后が戦死した人々の家々や家族を憫み給ふみこ、ろのほど」を「わが五千万の同胞」にも分かつたため(高崎正風による巻頭言)。(17)「今代の志士を感奮せしむるのみならず、将来の仁人をも興起せしめて億萬斯年我が帝国の忠勇義烈なる微風を維持する」(序)。(18)「一には出征軍士の労を紀し一には国民胸腹の一斑を写し国民の勤労を永く留めて後來昌泰の日に見んとするにあり」(はしがき)。(19)「再吟三誦して以て、先進の士を凌駕するの意気を養成せんことを望む」(緒言)。(20)「収載歌は「血涙ある至情を集めて英霊に供せんとせしもの」(编者高取慈恭の言)。(22)「戦死した足立美堅を「知れる人々」が「君が御霊を弔ひ

まゐらせむとて大和歌唐歌寄せられしもの」(序)。(23)「日露戦役の記念としてよみたる歌をあつめて言霊のさちはふ同し心の友とちにわかつ」(序)などである。(2)「4」「5」「7」「10」「16」「21」の七集については不明。

このようにアンソロジーの刊行理由は一様でなかった。人心の鼓舞が期待されていただけでなく、人々は歌を詠むことで国の名誉や天皇の仁慈を宣揚し、戦勝を祈願した。また兵士に感謝を伝えるために集を編み、彼らを慰安すべく実際に駅や病院などで寄贈してもいた。ここで、さらに注目しておきたいのは、「8」(戦況ヲ不朽ニ伝フル)、「14」(永く後生子孫に伝へん)、「18」(国民の勤労を永く留めて)などの語を以て戦争を記憶するためという動機もしばしば語られていることである。その内実について次節で検討したい。

#### 4、戦争を記憶する／悲嘆を分かち合う場としてのアンソロジー

人々はアンソロジーを記憶媒体とも考えていた。だとすれば、人々はそのいかなる記憶を留めようとしたのか。(18)『日露戦役記念和歌集』に注目したい。

同集は静岡市に本拠を置く不二之舎歌会(主宰は三浦直正)が刊行した。歌集序盤には東京在住の華族や御歌所歌人など有名作者の歌が並ぶ。これはこの種のアンソロジーの通例である。その後、三河、遠江、駿河などに暮らした人々の歌が続く。不

二乃舎の会員と思われる彼ら彼女らの歌を見よう。

悲知人之戦死

花見ても月雪見てもしのばれぬありし昔の君がおもかけ

坂本伝次郎

夜更くるまで家業を営める兵士の母を見て

かなしさをつゝむたもとに露ちりてやどるもあはれ夏の夜の月  
成瀬真三

題なし

今日はしもあすはいかにとつかの間も兄君のみぞ先おもはるゝ  
柴咲てつし

一首目は、詞書によれば知人の戦死を知ったときの感慨。雪月花の何を見るにも〈昔の君がおもかけ〉が思い出される。二首目、出征兵士の母を詠む。夏の夜、遅くまでその母が働いている。彼女の服のたもとには、涙かもしれぬ露が、月が映り込むほどに散りたまるといふ。三首目、柴咲は静岡精華女学校生徒。出征中の兄がいるようだ。兄は今日は無事だったかもしれない、でも明日はどうか、わずかの間にも〈兄君のみぞ先おもはるゝ〉という。〈先〉の一字が目を引く。戦争の勝敗といった公の大義よりも兄を気遣う私情を肯定するようと思われるからだ。それは与謝野晶子の詩「君死にたまふことなかれ」〔明星〕

一九〇四九の表現にも通じている。

当時、静岡市には歩兵第三四連隊が置かれていた。住民は兵士の歓送迎、兵士家族の慰安活動などにも参加した。そのためか、この〔18〕集には出征兵士を詠んだ歌が多い。特に戦死者を悼み、遺族を弔する歌がほぼ毎ページに現れる。三四連隊では五〇〇〇人の出征者に対し一一二人が戦死したといふ。また、戦死者は不二乃舎の会員にもいたようだ。集中で、笠島栄作と渡邊惣作の名の左脇には〈旅順港戦死〉また〈蓬臺子戦死〉と情報が付加されている。笠島の死を嘆く知友らしき人の歌もある。

こうしたアンソロジーは地域における戦争という観点の重要性を示唆してくれる。戦争を始めるのは国としても、被傷するのは具体的な人間の身体と心である。そして痛みを負った人々を抱きとめるのは個々の地域に他ならない。地域における喪失と哀悼の経験はいかなるものであったか、〔18〕のような集にはそれが確かに書き留められている。

さらにもう一点、戦死者の遺族にとつてのアンソロジーの意味についても考えておこう。〔22〕『玉碎集』は、足立美堅（\*旅順の二〇三高地で戦死）を悼む人々の歌を一書にまとめたもの。その父である宮内官僚の安立正声は、美堅の死が人々の詩歌により飾られたことを〈こよなき名譽〉とし、そのことで、二零三高地の礫石と砕け、鉄血に混せし身である美堅の〈燦爛たる光輝を、後の世遠く遺すこと〉ができるという〔書玉碎集

後」。愛息の死を後生まで伝える記憶媒体「『玉碎集』」への期待である。

ただし、正声にとって集はまた別の存在意義を有していたともいえそうだ。集の掉尾に正声が残した述懐と、その後続く歌に注目しよう。（\*以下の引用では清音の表記にも適宜濁点を付し、また句点も挿入している。）

美堅が勇ましく御軍に従ひて、君の御為、国のみために、身をさ、げしは、ほまれあることにて、いとうれしとおもほゆるものから、彼が年久にあつめてし雪蛩の光りの、むなしく消失せぬることのあたらしく、まして、おのれには、をのこごとでは櫃の実の一人のみなれば、今は六十ぢにあまれる老の身の、なみだもろく、見るもの聞くもことにつけて、夢にうつつにうたひ出でたるもの数つもりて百六十首となりぬ（…後略）

美堅の戦死は（君の御為、国のみため）のことだから（うれし）い。だが、彼が積み上げてきた学問の研鑽「『雪蛩の光り』が消えてしまったことは悔しい（\*美堅は新進の農学士で著書『いぬ』（一九〇七七、大日本農会）もある）。しかも自分にはただ一人の男子だった。六〇歳を越えた自分には何を見聞きするにも美堅の死が嘆かれて、夢うつつのうちに詠じた歌は一六〇首にもなった、という。ここから一三首を抄出しておく。

仇のうちし火つゝの玉にたな裏の我が白玉は砕けつる哉  
うせし子の便りはゆめとそが母の嘆きの声に嘆かる、哉  
うせし日と御魂祭れど中々に失しものとはおほえざり  
君の為うせし吾兒とは思へども涙せきあへぬ折も有けり  
よめむかへ家譲らんのあらまは昔語りと也にけるかな  
御軍のはて、かへらば外国にもまなびせむ心なりしを  
暫しだに吾兒が姿の老の眼に消せん術もあるべきものを  
あだは降り皇子はあれませりか計に嬉しき年の始なれ共  
万代と諸人さけび皇軍をむかへん日こそおもひやられる  
霊床の前にいすわりたらちねはなに思ふらん動く共なし  
あらましの外国々を巡りての後にやかへるあこが御魂は  
我心くみて語れる人はあれど心のそこももらしかねつもの  
万代と吾大君の大御代をいのらむほかにことの葉もなし

これらの歌のなかで正声は、〈我が白玉〉のように慈しんでいた美堅が（仇のうちし火つゝの玉）で砕けてしまったと嘆き、戦死の知らせも夢ではないかという妻の声にいっそう悲しみを募らせる。命日には美堅の魂を祭るが、その死を信じ切れず、〈君の為〉に（うせし吾兒とは思へども）涙をとどめることができない。

美堅に嫁を迎え家を譲る計画もあったが、それも昔語りとなった。軍務が終われば外国に留学したいという希望を語っていた姿も思い出される。しかし、どうすれば少しの間だけでも



《吾兒の姿》を忘れられるのか、と苦悶する。

ロシアを下し、皇子（\*高松宮宣仁親王）も生まれた新年にも心からは喜ぶことができず、このままでは、〈万代と諸人さけび皇軍をむかへん日〉が思いやられる（\*美堅の帰らない辛さが、いっそう迫りくるだろうことを予測するか）。妻は、霊床の前に呆けたようにじつと座り、一方、自分は美堅の魂は憧れていた諸外国をめぐつて後に帰ってくるのだらうと夢想している。弔問者が来て、〈我心くみて語れる人はあれど〉、しかし、本当の心底を洩らすことができないもどかしさを感じている。そしてなんとか〈万代と吾大君の大御代をいのらむ〉ことを語ることで、目下の苦しみをやりすごそうとしている。

一六〇首のうちで正声の思いは千々に乱れる。美堅の死を君国のためのやむをえない死として納得しようとするが肉親の感情が、その倫理的な規制を越えて溢れ出てしまう。さらに正声は〈今はしも何か願はんうた詠て心のきりのはるけんをこそ〉とも詠む。今はもう何も願うこともできない、ただ歌を詠んで心の霧の晴れることを願うだけだ、という。

してみると、『玉碎集』は単に美堅を記憶するための追悼集ではない。正声にとつては自分では制御できない痛苦や煩悶を吐き出す場だった。詠むことで〈心のきり〉を払いたいという切実な願いを託す場だった。そして、そのことによりアンソロジーは、肉親を失うなどして傷ついた人々が寄り合い、ともに悲嘆を分かち合う場ともなりえたようである。<sup>(24)</sup>

ところで、同じく愛息の死を悼む歌集としては、〔15〕高崎

正風（宮内省御歌所長）による『おやごころ』がある。高崎の長男、元彦も旅順の攻防戦で戦死している。だが、高崎は元彦を悼みながらも、その死を国家や天皇のための榮譽ある死として意味づける。パフォーマンスを皇后と行う。そして、元彦の遺児も再び国家に捧げようと詠じている。靖国の論理にも通じる両者のやりとりについては以前にも論じたことがあるので、繰り返さない<sup>(25)</sup>。もちろん、正声も前掲歌において美堅の死を〈君の為うせし吾兒〉とあきらめようとした。けれども、下句では、そう〈思へども涙せきあへぬ折もありけり〉と、国家的なモラルの規範を一瞬超えていく私情の閃きを言語化していた。正声と正風、ともに宮内官僚で愛息を失ったという境遇の似通う両者だが、詠歌には埋めがたい距離がある。

なお、歌人としての正声は〈常に御歌所の作を罵倒〉し、所長の高崎については〈殆ど一文の価値なきが如し〉と評したと伝わる<sup>(26)</sup>。

## 5、日清戦争と「新派」和歌の誕生

佐佐木信綱は日清戦争当時のことを次のように振り返る。

明治二十七八年の頃、わが国が国家的大戦役に携はつた當時は、国民が自覚の第一歩に入つた時であつた。その頃は、自分等歌人の胸にも、歌に就いて、旧来の歌に対する不満

足の念とともに、歌といふものに対する新たな覚醒が生じた。所謂新派の運動と称せられるものは、我人とともに、この覚醒に基づいたのであつた。

〔序〕『改訂 おもひ草』（一九一九、博文館）<sup>28</sup>

信綱が言うように日清戦争と「新派」和歌の誕生は確かに関わっていたのだろう。だが、戦争が「歌といふものに対する新たな覚醒」をどう促したのか、その具体的状況については、信綱にも、その他の人にも詳しい証言や指摘が見当たらない。本論を終えるにあたり、この問題を考えておこう。

そもそも、後に「新派」を自称する歌人たちは日清戦争期のアンソロジーにどの程度参与していたのか。目に入った限りで〔1〕〔2〕〔4〕にその人たちの出詠がある。以下に作品数を整理しておく。（\*短歌と他（新体詩、軍歌など）を分けて記載。また、同じ作品でも集が異なる場合はそれぞれ1と計数。）

	〔1〕	〔2〕	〔4〕	出詠作品合計
佐佐木信綱	歌1他1	歌12他1	歌30他1	46
与謝野鉄幹	歌14他0	歌11他3	歌6他8	42
金子薫園	歌1他0	歌4他0	歌10他1	16
落合直文	歌2他0	歌2他0	歌1他0	5
正岡子規	歌2他0	歌1他0	歌2他0	5
大塚楠緒子	歌0他0	歌1他4	歌0他0	5

信綱、鉄幹、薫園（\*出詠は雄太郎の名）、落合直文、子規、楠緒子が上位の五名である。他に鮎貝槐園、岡麓、国分操子らの名もあるが数において五人に及ばない。

信綱と鉄幹の出詠数が突出しているが、信綱と戦争の関わりについてはすでに多くの先行論文がある。したがって、ここでは特に鉄幹と薫園、二人の師である落合直文に注目する。すなわち、あさ香社の歌人（\*鮎貝槐園、国分操子も同門）が日清戦争とどう対峙したかが問題となる。

あさか社は一八九三年に落合のもとに結成された。社友は当初から時事的な内容の歌を「自由新聞」等に発表していた。その彼らが翌年七月の日清開戦にあたり奮い立ったことは想像に難くない。歌を見よう。〔1〕および〔2〕（後ろ三首）より引く。

題しらず 落合直文

耳塚のありてふことをまつるはぬからのえみしに聞かせて

しかな

嗚我聲

いざから子あさらひくらへ日の本の益荒猛夫がこのあさら

ひを

示人

筆とりて何をか言はむ事はただ此の太刀にありただこの太

刀に

与謝野鉄幹

予備の軍籍にありて私に従軍もなり難ければ

伝へこし家のたからの太刀はあれど佩く時なくて我は経ぬ  
らむ

宣戦令の出でたる日謹みて詠める

いにしへに何かゆづらむ耳塚を再びつくもほどちかくして  
失題 金子薫園

この夜頃太刀を枕にまどろめば仇うち得たる夢のみにして

擬管中作

たきすてし簾のけぶりかつ消えて雪よりしろしけさのはつ  
霜

矢さけびの声とき、しは夢なれや月よりおろす山おろしの  
風

塞上曲

かゞり火の煙は消えてくらき夜にいづこと知らず角の声す  
る

落合と鉄幹が〈耳塚〉を詠む。かつて秀吉が朝鮮出兵後にそ  
れを築いた故事を踏まえ、日本兵の歴史的な優越性を〈からの  
えみし〉に誇示しようというのだろう。〈耳塚〉は歌語として  
は珍しいものと思われるが、師弟がともに詠むのは、あさか社  
内の歌会などで詠まれたからか。

落合の二首目は詞書に〈瘳我臂〉とある。〈から子〉唐子  
に対して私の尻尻にみさらひをなめよ、という意味である。清兵

を侮辱し嘲笑することが目的としても、際だって卑陋な内容に  
見える。

鉄幹の〈筆とりて〉の歌は〈太刀〉での事態解決を示唆する  
壮士の心情を述べた歌である。だが実はこれも開戦一年前にあ  
さ香社の題詠「剣」で詠まれたものだ<sup>②</sup>。薫園にも太刀を詠んだ  
〈この夜頃〉の作が見えるが、もしかしたら、こちらも同時に  
詠まれた題詠だった可能性がある。

さらに薫園には〈擬管中作〉〈塞上曲〉などの作品がある。〈擬  
〉という字から従軍兵士や彼らの兵営生活を想像して詠んだ作と  
わかる。歌は〈かゞり火〉や〈矢さけびの声〉といった軍陣に  
いることを示す語に、〈はつ霜〉や〈山おろしの風〉といった  
景を合わせるといった具合で、いささか安易にも見える。第一  
これでは日本の景観と変わらず、日清戦争というアンソロジー  
のテーマを反映しきれていない。〈塞上曲〉は皆で詠まれたと  
いう意味だが、これも実は社友間では戦前からしばしば共有さ  
れていた題である<sup>③</sup>。

ところで、菅聡子は樋口一葉の和歌を考察した注(7) 前掲  
論文で、(2) 収載の歌々について次のように述べていた。

「日清戦争」というテーマが公の場において歌われる限り、  
その歌の方向性はあらかじめ決している。『征清歌集』の  
大半がそうであるように、天皇の「大御心」をたたえ、そ  
の「みいくさのみいつの風」がまつろわぬ「もろこし」や

「高麗人」を「なひきふ」せることを誦い、一方その「大君」のため「国のため」死ぬことを「花の誉」とする。「日の本」の「ますらを」たち、「ものゝふ」たちは、「いさみ」たち、「日々にと」いでいた「心の太刀」「日本たましひ」を「老いたる龍」にふるう。そして、国に残った者たちは、戦地の「ますらをの友」の活躍に思いを馳せ、その武運を祈る。

昔は、日清戦争が題として詠まれるときに、その表現がほぼ固定化されていたと指摘する。もともと、それら凡百の詩歌に比べれば、さすがにあさか社友の作はところどころにオリジナリテイの片鱗を見せる。しかし、彼等の表現にしても多くは開戦前から抱えていたテーマやイメージの焼き直しだった。ようにするに、彼らの手腕をもってしても戦争の現実はうまく詠めなかつたのではないか。かかる状況のなかで、社友たちにある種の焦慮、不満足感といったものが芽生えはしなかつたか。

当時の彼等の心境をうかがわせる資料が落合による「学弟与謝野鉄幹に与ふる文」(『二六新報』一八九五・三・二三)である。ここで落合は〈こたびの征清のみいくさは、歴史上ためしもあらぬ盛挙なり。歌よむものは、大にうたはざるべからず〉として、歌人が積極的に戦争を詠むことを肯定する。この文脈のなかで、門弟の鉄幹も〈歌よむものゝ務を、よくつとめ給へり〉と評価されている。しかし、その直後に〈されど、いづれも戦地を想像せるもの、靴をへだて、痒きところをかくが如き心ちせら

る、をいかにかせむ〉と、その物足りなさも指摘されているのだ。代わって落合は梨園という人物の作を称揚する。

梨園の歌につたなきは、君のよく知るところなり。かれ第二軍の一兵卒として、かの地にあり。このごろの書に、たまにあたり斃るゝは誰ぞ故郷の母のふみをばふところにして

といふ一首の歌あり。こを君の歌にくらぶれば、或はまさるところあらむか。こは、歌の巧拙にあらず、見聞するところ実際にして、君の如き、想像の歌にあらざればなり。梨園が具体的に誰かはわからない。だが、出征兵士で直文と手紙のやりとりをしていたこと、周囲の人から歌はつたないと思われていたことがわかる。あさか社門人の一人だったのだから。

落合が称揚するのは梨園の歌が〈見聞するところ實際〉である点である。〈歌の巧拙〉よりも直接体験の重要性が強調されていることに注意したい。日ごろからつたないと思われていた梨園の歌が、実体験を下敷きにする点で、鉄幹の〈想像の歌〉をしのぐ。さらに落合は歌人が見るべきもの、歌に表現すべき対象について言及する。

とりでの篝火、影さむきところに、母の写真をとり出でて、

見る人はたれ。月になきゆく雁をきゝて、故里の空をながむる人はたれ。妻のおくれる下着の上に、あかきあとの見ゆるは、縫ふをりに灑ぎし涙にやあらずや。父よりおくれるふみに、いさぎよき死をとげよとあるは、勝ちてはやくかへれといふにはあらずや。(中略)：負傷者のやみふせる露宮のあたり、近くよりきて、なくなる狼の声はいかに。ふきくる風もなまぐさき枯野原、たふれふす屍の上に、あつまりくる鳥のさまはいかに。枕頭の麵麴をひきゆく鼠、背囊の道明寺をあざる雀、いづれか歌よむもの、材料ならざらむ。(中略)：夜ふけてきこゆる笛の音は、いかなる人のすさびか。幾隊の軍人、夢うちさまして、そをきかむ、そをきゝたる時のこゝろはいかに。かなしきか、たのしきか、人によりておなじからざらむ。その人々の心々をうつすも、また歌よむもの、のつとめならずや。

『落合直文著作集Ⅰ』(一九九一、明治書院)

重要な点を整理しておこう。落合は鉄幹に、(a)〈人によりておなじからざらむ〉、(人々の心々をうつす)ことを求めた。たとえば、ある兵士は篝火の蔭に隠れて母の写真を取り出し、故郷への帰心をおさえきれずにいるかもしれない。ここでは、戦場に対しては、つねに太刀を握り腕を撫すような、それまでの題詠による類型的な人物表現は退けられている。(b)人の心の細部や建前の裏の本音にまで踏み込むことも期待している

ようだ。たとえば、父が子に書き送る手紙にはいさぎよき死を言いながら、実は彼の早い生還を願うような心情が隠れているのではないかと。

(c)に、戦争を詠む歌としては「女々しさ」として忌避されかねないような感情までが表現すべきものとして肯定されていることにも注意したい。(＊鉄幹のちに「虎剣調」をやめたこと、「明星」が女性歌人を押し立てて一世を風靡したこと想起する。)

(d)〈歌よむもの、材料〉を細かく蒐集することも勧める。文中に〈背囊の道明寺をあざる雀〉とあるが、これは軍用に携帯した干し飯をついばむ雀を指す。兵士が直面するのは劇的な戦闘シーンばかりではない。戦地における小閑、彼らの日常にも歌材はあるのだ。(e)対象の拡大は、また用語の拡張でもある。兵の枕頭に麵麴を引く鼠、負傷者の眠りを脅かす狼などがそれまでの和歌で多く詠まれていたとは思われない。

(a)～(e)まで、落合がどのような歌を求めていたか論点を整理した。実に、これらの示唆は、それ以前から種々の和歌改良論で指摘されていたような、いくつかの歌の欠点を補正する具体的な方策となっている。(明治新派和歌集の「嚆矢」とされる鉄幹の『東西南北』(一八九六、明治書院)が刊行されるのは、この「学弟と謝野鉄幹に与ふる文」発表からおおよそ一年と四カ月後のことだが、近い将来に姿を現すであろう「新派」和歌のヴィジョンが師弟のやりとりのなかに明らかに胎生し始めてい

るようだ。

しかし、なぜ日清戦争が「新派」和歌時代を急速に招き寄せることになったのか。落合が戦地にいる梨園から歌を受け取り、内地にいる歌人の〈想像の歌〉ではカバーしきれない領域——戦地の多様な状況と、生死の問題を前に複雑を極める人心の在り様——があることに、あらためて気づいたからか。しかし、おそらくこの問題は落合や鉄幹のみを「新派」和歌の起源と論断することで解決となるほど単純ではなからう。少なくとも、師弟がこの認識に至るまでには和歌改良論以前からのいくつもの歴史的な文脈が走っている。また同時代的な社会や諸表現との関連なども考えあわせる必要がある。後者について思いつくことを簡単に記しておく。

一つは、人心を描出することへの興味が深まっていたことである。木村洋によれば、一八九〇年代初頭、自由民権運動の後退とともに直接的な政治行動とは無縁な（一個人の内面や信念という領域）が問われるべき課題として同時代の表現者の間で浮上したという。それも「天資英邁」などのような慣習的な形容を許さない、複雑な陰影を帯びたものとして把握され始めた<sup>36</sup>とされる。落合の言う〈人によりておなじからざらむ〉種々の心の有り様を、その陰影まで写し出すことは時代の関心事だったのである。

また一つは、メディアが戦争をよりリアルに可視化し始めたということである。井上祐子によれば、従来、戦争を描くメディア

アには錦絵があった。それは〈画一的な人物と見得を切るポーズ、簡略化した背景〉で戦場を捉えていた。しかし、日清戦争以降、写真報道が始まると、そのテクノロジーは〈戦地を広く俯瞰したものや被害を受けた民家、捕虜となったり戦鬪で斃れた清国兵〉を生々しく捉え始めた<sup>37</sup>。

錦絵が題詠の世界に対応するとすれば、写真は「新派」和歌の理念と通じる。落合や鉄幹が新表現を模索する歌人が戦地の写真を目にする機会が確かにあつたろうから、そのことで、既存の類型的な和歌表現を飽き足らなく思う心情はいっそう強まりはしなかつたか。

このように、日清戦争前後期には表現すべきものとして複雑な人心が対象化され、それをよりリアルに写し出そうとする意識もまた先鋭化していた。戦地の写真報道が歌人たちの表現意欲に影響を与えていた可能性も捨てきれない。さらにいえば、表現する主体の社会的立場や自己認識にも変化はあつた。

戦争が〈若者の社会的地位を初めて認めた〉という窪田空穂の証言を押さえておこう。〈空前の戦役で、戦線に立つ兵卒として、銃後の労務を果す国民として、青年は最も多くの実績を挙げた。青年自身もそれを意識し、老年も亦それを承認せざるを得なくなつた〉。かかる社会的動向のなかで、〈自我の詩〉といふ語<sup>38</sup>が、〈極めて胸に親しい〉ものとして青年の胸に響き始めた<sup>39</sup>と空穂はいう。

戦争は特に若い人々に〈国民〉としての自覚と自恃をもたら

した。そして、彼ら彼女らにとつての「自我」がこよなく貴重なもの、表現すべき価値あるものとして認識され始めていた。こうした種々の要因を重視するならば、日清戦争は「新派」和歌というニューモードの一起源となつたと見ることに大過はないように思われる。あさか社周辺の青年たちも信綱も空穂も、この社会的、感覚的な変容のただなかにいたのである。

## 注

- (1) 木俣修「戦争と短歌」(『和歌文学大事典』一九六二、明治書院)には、(近代に到つて、日清・日露の両戦役、第一次世界大戦などを経たが、若干の戦争歌集、たとえば日清戦争における吉田又七の『海の一二年』という歌集、日露戦争における『征露歌集』といったものを見るのみで、特に戦争短歌と呼んで注目すべきものはやはり出現していない)とある。
- (2) 近年の成果に小松靖彦の『戦争下の文学者たち』(『萬葉集』)と生きた歌人・詩人・小説家(二〇二一、花鳥社)を中心とした一連の研究。篠弘『戦争と歌人たち』(二〇二〇、本阿弥書店)、三枝昂之『昭和短歌の精神史』(二〇〇五、本阿弥書店)など。
- (3) 『大東亜戦争歌集』は二〇〇五年、ゆまに書房より復刻された。また、二歌集について近年の成果に吉川宏志「戦争の魔力と闇——今『大東亜戦争歌集』を読む」(『歌壇』二〇二〇・九)、坪井秀人「戦争短歌に於ける前線と銃後——『支那事变歌集』その他」(『日本近代文学と戦争』二〇一二、三弥井書店)など。
- (4) 三枝昂之「戦後短歌史の問題点五つ」(『国文学』解釈と教材の研究)一九八三・二)は近藤芳美ら戦後歌人の課題は戦中短歌の(体制性の克服と第二芸術論への反撃)にあったと説く。
- (5) 敗戦直後から、代表的な論者がそろつて評価したのは無名兵士たちの歌、現地詠である。木俣修『近代短歌の史的転回』(一九六五、明治書院)は、それを(すぐれた戦争文学の一つ)で(真実の人間の声)とした。他に杉浦明平「写生論発展のため」(『アララギ』一九四六・一)、渡辺順三「近代短歌史」(一九四九、真理社)など。こうした評価については篠弘「戦争と歌人」(『現代短歌史Ⅰ 戦後短歌の運動』一九八三、短歌研究社)に詳しい。
- (6) 岡山巖「日清日露役と短歌」(『国語と国文学』一九四三・六)
- (7) 菅聡子「樋口一葉と『和歌』」(『帝国の和歌』二〇〇六、岩波書店)は日清戦争を題とした一葉歌を分析する。加藤孝男「日清戦争と歌人」(『与謝野晶子をつつた男』明治和歌革新運動史)二〇二〇、本阿弥書店)は直文、信綱、鉄幹らの戦争詠に着目し(近代戦争歌の源流)、(近代翼賛歌の端緒を拓いた)と位置づける。松村正直「戦争の歌」(二〇一八、笠間書院)は日清・日露戦争期の詩歌一八首を取り上げ丁寧な解説を付す。
- (8) 四宮憲章、鈴木敬親「明治文学会創立大意」(『明治文学』一九九四・一〇)
- (9) 署名なし「例言」(『詩歌俳吟 硯の友』一八八四・九)
- (10) 開戦と同月に内村銳之「政治卜文学ノ関係」(『明治文学』

一八九四・七）が掲載されている。

(11) 芳賀真咲『瓊才集編纂の大旨』（『瓊才集』書誌は本文内）

(12) 荒川章二「増補 軍隊と地域」（二〇二一、岩波書店）

(13) 本論では触れないが雑誌に戦争詩歌を投稿する人もいた。太田水穂「思ひ出の記」（『短歌雑誌』一九二二・九）は長野の師範学校在学当時を回想して、〈丁度支那と戦争の起こつたばかりの時であつた。多くの雑誌は戦争を材料とした「振気篇」などを募つてゐた〉こと、同級の島木赤彦とともにそれに応じて投稿したことを記す。

(14) 黒岩比佐子『編集者国木田独歩の時代』（二〇〇七、角川書店）

(15) 森林太郎「相聞序」（与謝野寛『相聞』一九一〇、明治書院）

(16) 「ハガキ集」（『読売新聞』一九〇四・四・一三）

(17) 日清戦争と国民形成の問題は原田敬一「日清戦争」（二〇〇八、吉川弘文館）、大谷正「日清戦争」（二〇一四、中央公論社）などを参照。

(18) たとえば、木俣修『近代短歌の史的展開』注（5）に前掲。

(19) 小松裕「近代日本のレイシズム―民衆の中国（人）観を例に」（熊本大学『文学部論叢』二〇〇三・三）参照。

(20) 以上、歩兵三四連隊と地域についての記述は注（12）荒川を参照。

(21) 笠島の歌は〈かへらじと思ひの川にかきながすこの水くきはかたみともなれ〉、渡邊の歌は〈国のためすつる命はかるけれど親のなざけの重くもあるかな〉。

(22) 小川清松は〈笠島栄作君が戦死せられしをき、て〉の題で〈仇

の野のけむりと空に消えし君国を守りの神とあふがん〉と詠む。

(23) (20) 高取慈恭『弔魂詩歌集』も大阪の南河内郡の戦死者一三〇人に捧げられたもの。

(24) アンソロジーには次のような歌がある。〈我が弟も亦戦死したれば〉の題で、〈弟も君とほどなくたふれたりともにを尽せ雲の上にして〉（田口重男）、また今様に〈死して余栄はありぬとも、生きての幸といづれぞや、悟りもえせぬ吾等には、此世の君ぞほしかりし〉（岩泉弥橘）などがある。これらの歌は戦死者遺族の心情に思いを寄せ、その悲嘆を多少なりとも分かち合おうという出詠者の心情の発露とも思われる。

(25) 大江志乃夫『靖国神社』（一九八四、岩波書店）、高橋哲哉『靖国問題』（二〇〇五、筑摩書房）参照。

(26) 拙稿「よむ」ことと心理学―「児童研究」誌における詩歌への期待」（『よむ』）ことの近代―和歌・短歌の政治学』二〇一四、青弓社）所収。

(27) 「故足立諸陵頭」（『朝日新聞』一九〇七・四・二二）

(28) 現物未入手のため経塚朋子、鈴木陽美、藤島秀憲「総論 資料から見る『思草』」（佐佐木信綱研究）二〇一三・二二より引用。

(29) 三枝昂之「和歌革新の先導者―落合直文と佐佐木信綱」（『聲音を聴く―近代短歌の水脈』二〇二一、六花書林）も先に引用した信綱の発言を受けて、日清・日露戦争が〈新しい短歌を促進する力としても作用した〉と指摘するが、この問題には、それ



以上踏み込んでいない。

- (30) 信綱と戦争との関わりを論じた近年の論文に、小松靖彦「佐佐木信綱の「新た世」の歴史観―戦争期と戦後を繋いだ論理付、「日本叢書」一覽」(「戦争と萬葉集」二〇二〇・二)、森本平「戦後歌集からみる佐佐木信綱の戦争観」(「佐佐木信綱研究」二〇一七・六)、拙稿「芸術」と国家への理路―佐佐木信綱とその和歌観の変遷」(「よむ」こと)の近代―和歌・短歌の政治学』所収)など。

- (31) 新聞「日本」(一八九三・五・四)には〈藩閥〉、〈新官人〉といった題詠歌が掲載されている。

- (32) 初出は「自由新聞」(一八九三・七・六)、「閑情偶寄」一〇首のうち(「事はただ此太刀にあり徒らに何をか云はむ只この太刀に」とある。『現代短歌大系 二巻』(一九五二、河出書房)を参照。

- (33) 「自由新聞」(一八九三・八・四)、「日本」(一八九三・六・一八)に同題での出詠がある。

- (34) 神祐一「明治二十年代前半の和歌改良論の再検討―和歌に対する批判のパターンに注目して」(「日本近代文学会北海道支部会報」二〇二一・五)

- (35) 小泉夢三「明治大正短歌資料大成 二巻」(一九四一、立命館出版部)

- (36) 木村洋「徳富蘇峰の人物論―「ジョン・ブライト」『人物管見』『吉田松陰』(「日本文学」二〇一九・二)

- (37) 井上祐子「日清・日露戦争と写真報道 戦場を駆ける写真師たち」(二〇二二、吉川弘文館)

- (38) 『日清戦争実記 第二編』(一八九四・九、博文館)には落合や鉄幹の歌が掲載されているが、巻頭には「朝鮮京城凱旋式図」(＊写真家の小川一真による)と題された三枚続きのパノラマ写真も掲載されている。

- (39) 窪田空穂「明治時代の和歌革新者」(『現代短歌叢書 一〇巻』一九四一、弘文堂)

(まつざわ・しゅんじ／桃山学院大学准教授)